

演劇と教育

藤木宏幸

昨年十二月、東京・中野公会堂でミュージカル「雪ん子」の公演があった。すでに劇団四季によって上演された演目であるが、今回ののは、関東国際高等学校演劇科の卒業公演であった。この高校で演劇論を教えておられる森秀男氏(演劇評論家)によると、踊って歌ってのミュージカルは、若い生徒たちにとって難しいもののだが、大変良い上演成果を収め、とくにダンスはなかなか立派なものであったという。関東国際高校(旧名関東女子高校)は、四年前に日本で最初の演劇科を設けて、正課で演劇教育をはじめた高校である。劇団四季のスタッフに協力を求めて、演劇概論、演劇史、作品研究などの講義と、台詞、舞踊、演技実習など実技を三年間に四三単位修得するこ

とになっている。三年前には、兵庫県立宝塚北高校という新設の高校が演劇科を開設して、公立高校で最初の演劇教育がすすめられている。こちらは劇作家で大阪大学教授の山崎正和氏や、京都在住の劇作家で大阪芸術大学の秋浜悟史氏らが協力して授業が行われており、NHKテレビでもその内容が紹介された。

私たち日本演劇学会の「演劇と教育」分科会のメンバーは、このふたつの高校の演劇科の授業を参観し、生徒たちや指導の先生と懇談する機会を得たが、なによりも心うたれたのは、生徒たちが教室で実に生き生きとしており、真剣に課題ととりくみ、身体を動かし、はきはきとものを言うことであった。両校とも演劇科が誕生したばか

りで、草創期の意気こみと熱意が強く感じられたし、先生も生徒も一体となって、授業をすすめているのが素晴らしい。

高校の段階での演劇の教育というと、タレントや芸能人の養成所のような誤解を受けがちであるが、けっしてそういうたぐいのものではない。両高校とも、「正しい言葉、正確な国語」「美しい動作」「豊かな表現力」を総合的に育てながら、創造性と協調性を養うところに教育目標をおいている。現今の教育が知育偏重であることはすでに指摘されているが、国語教育ひとつとってみても、文章の読解力が中心で、それに文章表現法などが加えられるにすぎない。「話す・聞く」という教育はほとんど行われぬのが実情であろう。戯曲が教材

として教科書に載っている、これは「大学受験には出題されないから」といって、授業ではとぼしてしまふことが多いという。大学の入学試験では、英語のヒアリング・テストまでとり入れられているというのに、国語の方はほとんど文章読解能力のテストで終っている。こうした知識偏重の教育の元兇は、現在の大学入試の方法にあることはいうまでもないが、それだけに高校演劇科の開設は、現状への大きな挑戦であるといつてもよい。

高校の演劇科の授業は「演劇を教える」のではなく、むしろ「演劇による教育」なのである。その言葉を教えられたのは、日大鶴ヶ丘高校の米本一夫先生によってであった。文部省の委託で高校での演劇教育の実験校として指定された鶴ヶ丘高校では、二年間にわたって演劇を正課に組みこんで授業を行い、貴重な成果を収め、その報告書も提出されている。日常的な言語訓練、身体訓練に合せて、クラス全体がひとつの演劇公演にとりこんでいく。そのなかで生徒たちが、みごとに変わっていく過程が報告書に書かれている。生徒のかくされていた

能力が発見され、自己開発と上演チームへの協力によってクラス全体が生き生きと変貌していくさまは、まことに感動的である。演劇クラスを担当された米本先生、勝島先生などの指導が適切であったことはいうまでもないが、演劇による教育は、言葉を自分自身のものとして話し、また聞き、同時に文章を深く読みとり表現する能力を開発し、演劇創造はたったひとりではなにもできないから、稽古の過程で、己れと他の関係を自覚し、また全体への協調性を養っていくことになるのである。いわば演劇教育は、そうした自己開発と創造性、協調性を育成していく全人教育であり、人間を根底から変えていく人間教育の核となるものだといつてもよいと思う。今、学校で問題となっているいじめや校内暴力、おちこぼれなど、さまざまなひずみや歪みは、こうした演劇教育の行われる場ではけつして起つてこない。

現在、幼児教育では劇あそびがさかんにとり入れられているし、小中学校でも、ロール・プレイング、クリエイティブ・ドラマティクスの方法や、府中市で効果をあ

げているリーダーズ・シアター（朗読劇）など、さまざまな演劇による教育が実験されている。またクラブ活動である高校演劇は、全国で二千三百校を越す高校が組織されていて、これは世界にも例のない大規模のものなのである。

しかし、公教育の課程では（たとえば中高校の芸能科に美術・音楽・書道などはあつても「演劇」はない）完全に除外されてしまっている。私たち演劇と教育分科会では諸外国での演劇教育の実態を調査している。昨年来日したバートン・ラッセル博士（ノースカロライナ州立大学）からアメリカの、孫維善先生（中国芸術研究院）から中国の演劇教育の実情などもうかがい、イギリス、アメリカ、オーストラリアなどでは、演劇教育がさかんですぐれた成果をあげていることを知った。日本の教育課程のあらゆる場で、演劇教育の必要性がもっと認識されてよいのではないかと考えるのである。偏差値による輪切りや選別教育の横行している現在こそ、教育現場に活力を与え、全人教育、人間教育である演劇教育の実践が求められるのである。